

<講演抄録>2. 埋伏した小臼歯・大臼歯への対応(第38回東北大学歯学会講演抄録)(一般演題)：自然萌出例と牽引例

著者	佐藤 亨至, 三谷 英夫
雑誌名	東北大学歯学雑誌
巻	20
号	1
ページ	49-49
発行年	2001-06
URL	http://hdl.handle.net/10097/31753

第 38 回東北大学歯学会講演抄録

日時：平成 12 年 12 月 15 日（金）

場所：東北大学歯学部 B 棟 1 階講義室

—— 一 般 演 題 ——

1. 根面板の形態および義歯床との接触状態と支台歯周組織状態との関連

井村卓司, 稲井哲司, 坪井明人, 渡辺 誠*, 佐々木啓一（東北大学大学院歯学研究科顎口腔機能解析学分野, *加齢歯科学分野）

根面板はオーバードンチャーの支台装置として広く利用されている。しかし、根面板装着歯は、義歯床に被覆され、非生理的な環境に置かれるため、歯周疾患に罹患しやすいとされている。またその予後には、根面板の形態および義歯床との接触状態が関与するものと考えられているが、詳細は明らかではない。そこで今回、根面板装着歯の歯周組織の状態と、根面板の形態、義歯床との接触状態との関連について検索した。被験者は根面板を支台装置とするオーバードンチャー装着者 33 名で、被験対象とした根面板は 76 個であった。被験対象の根面板装着歯について、根面板の形態、根面板と義歯床との接触状態、歯周組織状態について診査した。根面板と義歯床との接触状態は、フィットチェッカーを用いて接触面積から 2 群に分類し、診査した。さらにスクエア型根面板に関しては義歯床との接触を根面板上面と側面とに分けて検索した。また、支台歯歯周組織状態はポケット、出血傾向、動揺度および歯肉退縮の 4 項目について診査し、(+)・(-) の 2 種に評価した。

その結果、根面板形態の異なるドーム型とスクエア型とでは、支台歯歯周組織状態に有意な差は認められなかった。一方、根面板と義歯床が接触 (+) のものは、接触 (-) のものに比較し、同様に、スクエア型根面板側面と義歯床との接触 (+) のものは、接触 (-) のものに比較し、ポケット、出血傾向および動揺度いずれも (+) が有意に多く認められた。すなわち、支台歯歯周組織状態には、根面板と義歯床との接触状態が影響を及ぼしていることが示された。

2. 埋伏した小臼歯・大臼歯への対応 —— 自然萌出例と牽引例 ——

佐藤亨至, 三谷英夫（東北大学大学院歯学研究科 発達加齢・保健歯科学講座顎発達・咬合形成学分野）

矯正臨床において埋伏歯に遭遇する機会は多く、その処置に苦慮することが少なくない。その処置に当たっては、まずその原因の推定を行ったうえで、歯胚の 3 次元的位置の確認や、歯根の屈曲・骨性癒着・隣在歯の歯根吸収の有無等を考慮することは言うまでもないが、多数歯を牽引誘導する場合には適正な牽引力と固定源の確保にも十分な留意を払う必要がある。第 37 回本学会において、同側の上顎 3 前歯が埋伏し、牽引・配列した 2 症例を報告し、こうした治療症例のデータベースを構築することによって類似症例の検索・治療に役立つことを述べた。今回は、小臼歯・大臼歯が埋伏した 2 症例について若干の知見を交えて報告する。

【症例 1】 10 歳 5 カ月の男子。濾胞性歯嚢胞を伴う [345] の埋伏症例。濾胞性歯嚢胞の摘出後矯正科に配列を依頼されたが、保障して経過観察ののち自然萌出したため動的治療を見合わせた。

【症例 2】 10 歳 8 カ月の男子。[6] の近心傾斜を伴う埋伏。マルチブラケット装置により過萌出していた [6] の圧下後、下顎近心の歯列を固定源として遠心まで延長したアーチワイヤーの断端よりエラスティックを用いて [6] の直立・牽引を行った。

埋伏の原因が疑われた場合には、まずはそれを取り除いて経過観察すべきである。特に大臼歯の埋伏においては、対合歯の挺出や遠心への固定源の確保が困難になる場合があり、治療メカニクスの適用の際には、柔軟な対応が必要となる。そのためにも効率的な症例検索や治療データベースの構築が望まれる。